

## M 氏邸訪問記(2018.9.19)

### 1. はじめに

M 氏がテクニクスの最上級ターンテーブル SL-1000R を導入されたとの報に接し、I 氏とともに訪問してきました。

M 氏邸訪問は、[前回訪問](#)の iPurifierAC の導入の効果の試聴以来ということになります。今回はその後の SL-1000R 導入の効果を確認させていただきました。

### 2. M 氏邸のシステムの概要

テクニクスの最上級ターンテーブル SL-1000R については、2 度ほど M 氏とともに試聴会に参加しています。

[テクニクスリスニングルーム試聴記\(2018.4.20\)](#)

[シマムセンオーディオ試聴会 \(2018.5.27\)](#)

M 氏は歴代の SP10 シリーズを使用してこられました。上記の試聴会の結果、SL-1000R の実力に確信をもって導入されたとのこと。

SL-1000R については、純正アームの他、2 本のアームを取りつけられるように仕様を追加され、次のような構成にされています。

テクニクス純正アーム : MUTEC 神田零→Mysonic Stage1030→Accuphase C270

IKEDA IT407 Long アーム : SPU Royal→Accuphase C270

SME Series 5 アーム : Sure V15 Type5→Accuphase C270



今回次のようなアナログ盤と CD をセットで持参しました。

アナログ盤 : ANGEL AA9117C ヘンデル メサイア

オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア

CD : PAN Classics PC10351

ダニエル・ドルチ指揮ムジカ・フィオーリータ

アナログ盤 : ドイツグラモフォン SMG-1370/71

ベートーベン ミサ・ソレムニス ニ長調

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィルハーモニー管弦楽団

CD : M-Plus CCD 921124 ベートーベン ミサ・ソレムニス ニ長調

ダニエル・ロイス指揮 18 世紀オーケストラ カペラ・アムステルダム

アナログ盤のカール・ベーム指揮ウィーンフィルは M 氏が所有しているとのことで MQA-CD のみ持参しました。

MQA-CD : Universal Music UCCG-40072 モーツアルト レクイエム

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

### 3. M 氏邸のシステムの試聴経過

まずは、恒例のワーグナーからということで、クナッパブッシュ／ウィーンフィルのワルキューレ第一幕の CD とアナログ盤、およびクレンペラー／フィルハーモニアの前奏曲集のアナログ盤を聴かせていただきました。ワルキューレ第一幕のアナログ盤では、カートリッジを MUTEC と SPU Royal で再生しましたが、前者が透明度の高い抜けの良い音であるのに対し、後者はオルトフォンらしい厚みのある低域の押出の良い音で、オルトフォンをお使いの I 氏は後者を好まれているようでした。

M 氏に、導入後直ちにお気に入りの音が出ましたかという問いに対して、1 ヶ月かけて様々なチューニングを施したとのことでした。その中には、写真では分かりませんが、ターンテーブルシートの交換、アームベースとターンテーブルのベースの制振、純正アームの制振、コントローラーからの電源ケーブルの制振とノイズ対策等々です。

次に、グルダ／アバド指揮ウィーンフィルのモーツアルトの P 協 21 番のオリジナルのアナログ盤と CD を聴きましたが、アナログ盤では、MUTEC でグルダの艶のある響きがよく再現されていました。

この後、ベーム／ウィーンフィルのブルックナーの 4 番のアナログ盤と MQA-CD を聴きましたが、アナログ盤は MUTEC、SPU Royal N とも、聴き応ええがあり、MQA-CD もリマスターがうまくなされている印象でした。

ここまでの印象を要約すると、M 氏のヘビーチューニングがどのように効果を発揮しているかは分かりませんが、現状の SL-1000R は、以前の SONY のシステムより、構成がどっしりとした安定感のある再生が行われているように感じます。

続いて、ベートーベンの交響曲 3 番のアナログでワルターとフルトヴェングラーで聴きましたが、I 氏は SONY のシステムで再生した、フルトヴェングラーのモノラル盤に盛んにうなずいておられました。

ついで、持参したメサイアのクレンペラー／フィルハーモニアのアナログ盤と最新の古

楽演奏グループによる CD を聴き比べてみましたが、クレンペラー盤が独自の解釈であるのに対し、最新の演奏が古典的な演奏で興味深く聴けました。

この後、ショルティ／ウィーンフィルのラインの黄金を MUTECH と SPU Royal N で、リヒテルのベートーベンの 12 番、I 氏お気に入りのフォン・シュターデの歌曲、ムーティ／フィラデルフィアのストラヴィンスキーの春の祭典、アルパンベルクのベートーベンの弦楽 Q1 番、ケルンコーンサート、ヴェルディのマスネーを MUTECH で聴いていきましたが、ここでテノールのカレーラスについて I 氏と M 氏の評価が分かれ、その他ワグナー歌手についても両者それぞれの声の質などにも最良があるようで、こうなると、音楽の解釈やオーディオ的な評価からかけ離れた領域に踏み入ってしまいます。ここで持参した荘厳ミサ曲をカラヤン／ベルリンフィルのアナログ盤とこれも 18 世紀オーケストラの新しい録音の CD で聴き比べてみましたが、それぞれの解釈の対比が興味深く聴けました。

さらに三角帽子のオリジナルアナログ盤、CD、MQA-CD を聴き比べてみましたが、MQA-CD のリマスターはうまくいっている印象でした。最後にバックハウスのハイドンのピアノソナタを聴いて、M 氏邸を辞しました。

#### 4. まとめ

テクニクスの SL-1000R については、かっちりとした、安定した再生ができており、アナログ盤のもつポテンシャルが引き出されていましたが、M 氏のヘビーチューニング前の音がどうであったか興味のあるところです。

以上